

9

国語問題紙

経済学部1・2部

人文学部1・2部（英米文化学科）

2023年2月9日

11:50～12:50（60分）

注意事項

— 注意事項は裏表紙にもある。問題紙を裏返して必ず読むこと。 —

1. 国語の問題紙は全20ページである。
2. 解答用紙は問題紙の中に折り込まれている。
3. 解答はすべて解答用紙の指定された欄に記入すること。
4. 試験開始の合図があるまで問題紙を開いてはいけない。

試験終了まで退室してはいけない。

5. 受験番号の記入については裏表紙を参照すること。

次の文章を読み、後の設問に答えよ。

フェミニストのマルクス主義に対する批判は、ジャッキー・ウエストの次の一語に尽くされる。

¹「家族は階級分析の外にある。」

マルクスは「階級」という概念をキータムとして社会構造を分析するが、「階級」とはもともと生産関係をめぐる概念であった。生産手段の所有／非所有をめぐって支配階級と被支配階級とが分化する。近代産業社会では、生産手段は「資本」と呼ばれるから、この資本をめぐって、それぞれ資本家（ブルジョア）と労働者（プロレタリア）とが成立する。労働者とは、生産手段を自己所有しないために、自らを労働力商品として市場で売り払うほかにような存在である。この労働市場には、労働力商品をめぐって二種類の人々が登場する。つまり買い手と売り手、使用者と ① である。市民社会の政治は、生産関係をめぐってこの二つの階級の間で争われる。

ところでこの「労働市場」に登場しない人々、女・子供・老人はどうか。彼らは「市場」の側からは目に見えないinvisible存在である。彼らは市場にあらわれないが、市場の外にバラバラに孤立して存在するわけではない。彼らは市場の外、「家族」と呼ばれる領域に隔離されて、家長労働者に扶養されている。市場に登場する人々だけが「市民 citizen」だとしたら、女・子供・老人は「市民」ではない。彼らはブルジョアでもなくプロレタリアートでもなく、ただブルジョアジーの「家族」（被扶養者 dependant）とプロレタリアートの「家族」にすぎない。そしてこの「家族」の領域に、ウエストの言うとおり、マルクスの「階級分析」は届かない、のである。

マクダナウとハリソンも「マルクスの著作の中には、女性に特有の従属について分析しようとする関心はほとんど見られない」と書く。彼女たちはまた「マルクスが万国の労働者に団結を呼びかける時、おそらくきつと彼は、男性たちに呼びかけているのだろう」と言う。

しかしこのことは、マルクスがフロイト的な意味で「男権的」であったことも、女性の解放に関心がなかったことも意味しない。マルクスにとっては「プロレタリアに固有の従属」はあっても「女性に固有の従属」はなかった。「女性に固有の従属」は「プロレタリアに固有の従属」に内属し、それに還元されたのである。だからこそ、「プロレタリア革命」によって、女性もまた自動的にかつ最終的に、解放されるはずであった。

²フェミニストのマルクス主義に対するこの批判は当たっている。マルクス理論は非常に精緻にできた市場の理論だが、

同時に市場の理論で、しかなかった。マルクスおよびマルクス主義者に誤りがあるとすれば、市場という社会領域が社会空間を全域的に覆いつくしているとは仮定したところにあつた。しかしこれは、マルクスだけの限界ではない。市民社会の自己定義が、もとよりそのように全域的なものだったのである。マルクスはただその同時代人と共に、この市民社会の自己定義を共有していたにすぎない。マルクスに「限界」があるとすれば、マルクスもまた自分の属する時代を超えられなかった、ということだが、この限界は、マルクスのみならず私たちのすべてが共有している「限界」でもある。

市場は全域的な見かけを持っているが、事実上は〈外部〉環境を前提しており、それに依存している。市場というシステムは、この〈外部〉を、ブラックボックスのように見えないものにする。市場は自己に内在的な論理のもとに、自律的 automatic に運動していると考えられている。市場は環境条件に非関与で、まして環境条件の側から逆に規制されることもない。したがって、市場で特定の商品が売れるとなれば、その商品は「環境」から無尽蔵に市場へと流れこみ、供給過剰で需要が飽和状態になるか利潤率を割るまでは、ストップしないと考えられている。「環境」条件によつて供給そのものに制限が加わることなど、市場にとつては予想外のノイズなのである。

労働市場についても同じことが言える。労働市場もまた〈外部〉環境から、労働力という資源を調達しなければならぬ。マルクスはこの〈外部〉の存在に気づいていたが、次のように書く。

労働者階級の不断のイ持と再生産とは、依然として資本の再生産のための恒常的条件である。資本家はこの条件の充足を安んじて労働者の自己保存本能と生殖本能とにまかせておくことができる。〔資本論〕

「本能」とは市場から独立した、市場が関与することも統制することもできないような変数のことである。労働力の再生産を、「本能」という定義できない不可知の変数に「委ねた」時、マルクスは、労働力再生産のための条件を、市場の〈外部〉へブラックボックスとして放逐し、それによつて ② 同様、家族の分析を「安んじて」放棄した。

市場が労働力の再生産を「労働者の本能に安んじて委ね」たというのは、マルクスの有名なフレーズである。本能とは元来そういうものである、というのは、本能について無定義を重ねるだけの ③ であつて、説明にならない。マルクスが「安んじて」労働力再生産の本能説を唱えることができたのには、それ相応の理由がある。

第一に、この時代の資本家は、高い失業率と高い出生率のおかげで、労働市場への労働力の調達について心配せずすんだ、という歴史的背景がある。労働市場は、市場の〈外部〉に、いつでも労働力商品に転化できる潜在的な労働力予備軍を必要としている。労働市場は、ただ顕在的な労働力（売れた労働力＝雇用者）と潜在的な労働力（売れない労働力＝

失業者)との間の境界として成立しているにすぎず、この境界は、開放的で流動的である。他のすべての商品と同じく、労働力もまた、売れた時にはじめて商品に転化する。したがって労働市場が成立するためには、必然的に失業者および労働力予備軍の存在が不可欠とされる。考えてみれば、初期の産業資本制とは、自給的 subsistent な農業経済に付着した、それ自体が〈外部〉経済であった。⁵この〈外部〉が膨張し自立をとげる過程で市場経済は成立したが、その成立期において、この〈外部〉の〈外部〉は、いわば無尽蔵だったのである。

しかしこれはもちろん、歴史的な条件に依存している。資本家は労働力の再生産をいつでも「安んじて労働者の本能に委ねる」ことができるとは限らない。^注今日の西独の出産ショウレイ策や、逆に中国の一人っ子政策などを見ると、「生殖本能」というものが時代の与件によって変わらうること、かつそれは直接・間接の統制の対象になることがわかる。国家が統制すればそれは「直接」の管理と見えるが、市場もまた再生産を統制しているにはちがいない——ただ間接的なしきたで。「生殖を本能に委ねる」ことを「自由放任(レッセ・フェール)」と言うが、これは「自由放任」という名の(間接)統制のことにほかならない。「レッセ・フェール」と言われる市場経済そのものが、その実「レッセ・フェール」という名の市場メカニズムの間接統制のもとにある。産業社会は、生産の領域も再生産の領域も、「レッセ・フェール」という名の同じ統制のメカニズムのもとに置いた。

マルクスに、「自由」経済市場の「自由」な統制のメカニズムのカラクリは見えた。『資本論』の中で、彼は「自由」な市場がいかにそのメカニズムを通じて、失業と恐慌という「不自由」に不可避免的に陥っていくかを、完膚なきまでにあばき出した。⁶だが、マルクスには、再生産領域の「自由放任」のカラクリは見えなかった。彼には、労働力の再生産は、人間の「自然過程」と見えた。

不思議なことに、マルクスには、男と女の性分業は、男と女の身体的差異にもとづく「自然」な分業と見なされている。マルクスは階級の間の対立や、「精神労働」と「肉体労働」の間の「分業」を、「自然」なものとは見なさなかったが、性分業は、これを「自然」なものに見なして不問に付している。「性」という階級対立は、自明視されるあまり、これほど見えにくいものである。あることがらを「自然」と見なすのは、それを不問に付すことである。⁷マルクスは、「自然」な女性観を、同時代人と共に共有していた。

フェミニストがマルクス主義について指摘したのは、この限界——性と生殖、したがって家族を「自然過程」と見なしたことよって、家族がマルクス理論の分析の射程に入っていないという限界——だった。

(注) 本文が書かれたのは一九九〇年以前である。

西独とは一九四九年から九〇年に統一するまで東西に分裂していたドイツの西側地域のことである。

しかしマルクス理論の限界は、マルクス自身の限界であるというより、市場の限界の反映だった。家族を市場の外に置いたのは、マルクス主義ではなく、市場そのもののほうだったからである。マルクス主義は、ただ市場の理論として、市場とともにこの限界を共有したにすぎない。市場が全域的なものだと仮定せず、マルクス理論にも包括性を要求しないならば、私たちはマルクス理論にないものねだりをしてこれを批判するよりは、その到達点を、限界とともに積極的に評価することができる。マルクス主義フェミニストがマルクス理論を「利用」するのも、その意味である。

(上野千鶴子『家父長制と資本制―マルクス主義フェミニズムの地平』による。ただし、一部変更した。)

問一 傍線1「家族は階級分析の外にある。」とあるが、その説明として最も適切なものを次の中から一つ選び、符号で答えよ。

- ア マルクス主義では、家族を自然過程の一部と考えるため、市場のメカニズムを明らかにする上で家族が分析対象とはならないということ。
- イ マルクス主義では、家族とは生産手段を自己所有しない人々と考えるため、社会構造を解明する上で家族が分析対象とはならないということ。
- ウ マルクス主義では、家族を「市民」から構成されるものと考えため、生産手段を自己所有しない家族は社会構造を明らかにする上で分析対象とはならないということ。
- エ マルクス主義では、家族を市場とは異なる内部メカニズムを持った集団と考えるため、社会構造を明らかにする上で家族が分析の対象とはならないということ。
- オ マルクス主義では、家族を市民社会に内在するものと考え一方、市場を全域的なものを見なすため、家族が社会構造分析の対象とはならないということ。

問二 空欄①に入る最も適切なものを次の中から一つ選び、符号で答えよ。

- ア 非使用者
- イ 非雇用者
- ウ 非市民
- エ 被雇用者
- オ 被生産者

問三 傍線2「フェミニニストのマルクス主義に対するこの批判は当たっている。」とあるが、「この批判」とは何か、その説明として最も適切なものを次の中から一つ選び、符号で答えよ。

- ア マルクス主義では、女性が解放されるためにはプロレタリア革命では不十分であるとしていたことに対する批判。
- イ マルクス主義では、女性は男性に従属する存在であると考えられていたという批判。
- ウ マルクス主義では、女性に強いられる特別な支配関係があることを前提としていなかったという批判。
- エ マルクス主義では、市場の参加者として女性を認めていたが、女性の解放には関心がなかったという批判。
- オ マルクス主義では、女性を家族という領域に位置づけて家族が果たす社会的役割を階級論的に分析しているという批判。

問四 傍線3「マルクスはただその同時代人と共に、この市民社会の自己定義を共有していたにすぎない。」とあるが、「市民社会の自己定義」とはどういうことか、その説明として最も適切なものを次の中から一つ選び、符号で答えよ。

- ア 人々が市場を社会空間に内包される領域として考えていたということ。
- イ 人々が社会空間と市場とを同一の領域として考えていたということ。
- ウ 人々が市民社会を全域的に捉え、女・子供・老人も含まれる社会そのものとして考えていたということ。
- エ 人々が市場を限定的に捉え社会はそれに内属するものとして考えていたということ。
- オ 人々が社会領域を全域的に捉え市場はそれに内包される領域として考えていたということ。

問五 傍線4「環境」条件によって供給そのものに制限が加わることなど、市場にとっては予想外のノイズなのである。」とあるが、なぜ「予想

外のノイズ」と解釈されるのか、最も適切なものを次の中から一つ選び、符号で答えよ。

- ア 市場は〈外部〉環境に影響を与えらることは考えられないから。
- イ 市場は〈外部〉環境がなければ成立し得ないと考えられるから。
- ウ 市場は〈外部〉環境に依存していると考えられるから。
- エ 市場は〈外部〉環境を前提として動いていると考えられるから。
- オ 市場は〈外部〉環境に制約を受けることがないと考えられるから。

問六 空欄②に入る最も適切なものを次の中から一つ選び、符号で答えよ。

- ア ジャッキー・ウエスト
- イ 労働者
- ウ 失業者
- エ マクダナウとハリソン
- オ 資本家

問七 空欄③に入る最も適切なものを次の中から一つ選び、符号で答えよ。

- ア アナロジー
- イ トートロジー
- ウ アイロニー
- エ アナクロニズム
- オ パラドックス

問八 傍線5「この〈外部〉が膨張し自立をとげる過程で市場経済は成立したが、その成立期において、この〈外部〉の〈外部〉は、いわば無尽蔵だったのである。」とあるが、「この〈外部〉の〈外部〉」とは何か、最も適切なものを次の中から一つ選び、符号で答えよ。

- ア 扶養者
- イ 顕在的な労働力
- ウ 労働市場
- エ 被扶養者
- オ 潜在的な労働力

問九 傍線6「だが、マルクスには、再生産領域の「自由放任」のカラクリは見えなかった。」とあるが、「再生産領域の「自由放任」のカラクリ」とはどういうことか、最も適切なものを次の中から一つ選び、符号で答えよ。

- ア 再生産領域は国家の統制を受けることもあるが、専ら本能による統制を受けているということ。
- イ 再生産領域は自由なシステムのように見えるが、「レッセ・フェール」という統制を受けているということ。
- ウ 再生産領域は人間の本能に委ねられるべきものであるが、自由であるがために環境条件が変わればその影響を受けるということ。
- エ 再生産領域は市場同様〈外部〉環境に非関与であるが、市場経済から間接的に統制されているということ。
- オ 再生産領域は人間の自然な営みの結果であるが、「自由放任」を放置すると再生産も「不自由」に陥るということ。

問十 傍線7「マルクスは、「自然」な女性観を、同時代人と共に共有していた。」とあるが、どうということか、最も適切なものを次の中から一つ選び、符号で答えよ。

- ア 性の分化を人間の本質とするが、性を基準とした分業は人間本来の在り方ではないとする女性観を同時代人と共にマルクスが持っていたということ。
- イ 性の階級対立を人類の本質とするが、男女の身体的差異による分業は認めない女性観を同時代人と共にマルクスが持っていたということ。
- ウ 性による分業を社会的前提とし、性の階級対立に無自覚である女性観を同時代人と共にマルクスが持っていたということ。
- エ 性による階級対立を認めつつ、性という人間的差異の本来性が強調された女性観を同時代人と共にマルクスが持っていたということ。
- オ 市場経済における性的分業を前提としつつも、男女の身体的差異が相対化された女性観を同時代人と共にマルクスが持っていたということ。

問十一 次の文のうち、本文の内容と合致するものを三つ選び、符号（ア～クの順）で答えよ。

- ア マルクス主義では女・子供・老人は市場の外に留め置かれ、市場からは見えない存在となっているため「階級分析」の対象とはならない。
- イ マルクス主義において女性はプロレタリアに内属する存在と位置づけられているため、プロレタリアの解放が女性対プロレタリアの階級対立を解消すると考えられていた。
- ウ 市場は独立に存在しているのではなく市場を成り立たせている環境があり、環境条件が変われば、その影響を受け市場内部の活動が制限されることもあり得る。
- エ 市場は〈外部〉を内包しており自律的に運動しているように見えて実は内在化した〈外部〉が市場を規定している。
- オ 市場が労働力の再生産を本能に任せておくことができたのは社会的条件が整っていただけで、いつの時代もそれが可能となるわけではない。
- カ 再生産領域におけるレッセ・フェールのメカニズムの例として西独と中国の政策があげられるが、これらはどちらも国家の生殖に対する直接統制である。
- キ マルクス主義に市場経済の全域性と社会的包括性が欠如していなければ、マルクス主義フェミニストはマルクス主義を積極的に「利用」することができる。
- ク マルクス主義フェミニストとはマルクス主義に忠実なフェミニストのことである。

次の文章を読み、後の設問に答えよ。

フレーベルは、幼稚園を設立する前に、指物職人さしものに六つの玩具を作成させ、それらを「与えられしもの Game」と名づけ、未シユウ学児aの教育で用いようとした。日本では「恩物」、英語ではギフト Gift と訳されている。フレーベルは神から子どもへの贈りものという意味を込めていると考えるのが通常であるが、もちろん、親から子へ、あるいは自然から子どもへの贈りものというニュアンスを排除するものではない。

これは六つの種類に分けられる(図を参照。なお、図は、莊司雅子の作成したもので、「恩物」ではなく「遊具」と記されている)。第一恩物は、羊毛でできた六つの球のみ。第二恩物は、木製の球と円柱と立方体の組み合わせ。第三恩物は、木製の立方体を八つの合同の立方体に分割したもの。第四恩物は、木製の立方体を八つの合同の立方体に分割したもの。第五恩物は、木製の立方体を三×三×三の合同の立方体に分け(ちょうどルービックキューブのように)、その

遊具一覽(第一から第六まで)

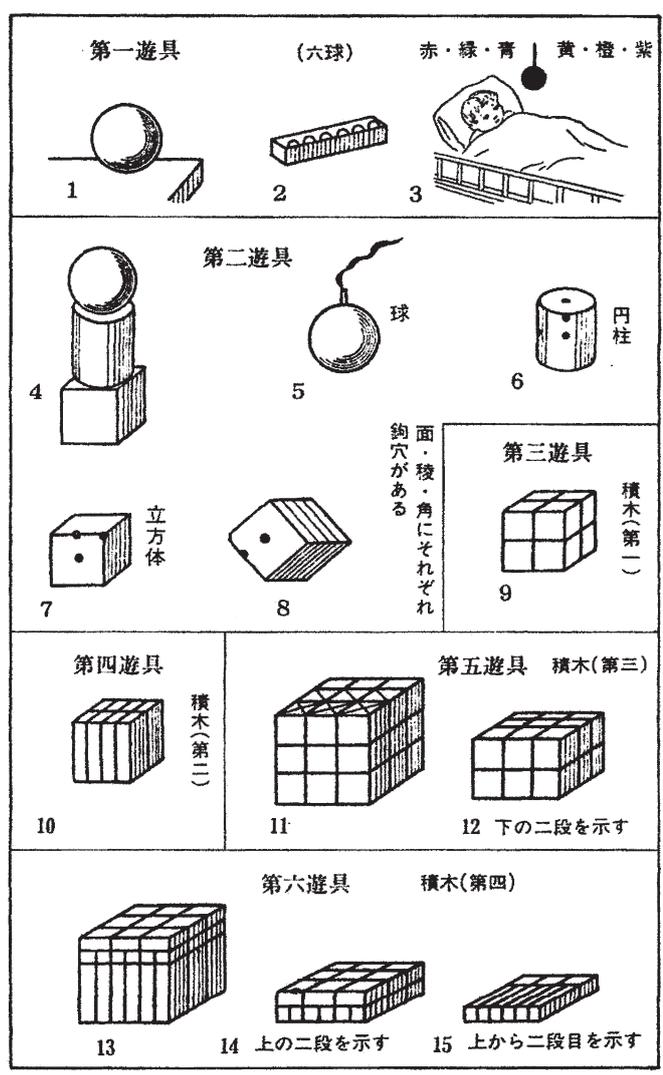


図 恩物の種類

うえて三つの小立方体をそれぞれ二つの合同の三角柱に分けて、別の三つの小立方体をそれぞれ四つの合同の三角柱に分けたもの。第六恩物は、文章では説明にかなりの紙**b**が奪われるため、図を参照いただきたい。第三恩物および第四恩物の立方体は一边が五センチメートル、第五恩物および第六恩物の立方体は一边七・五センチメートルであった。

このうち第三恩物から第六恩物までどれも立方体を直線でパーツに分けたものであり、部分によって構成される全体というフレール¹の基本的な世界観に沿ったおもちゃとなっている。非常にシンプルなおもちゃであるが、¹それには理由があった。

あまりにも形づくられすぎており、あまりにも完成されすぎているような遊具「……」では、自分からはや、なにものをも始めることができないし、それによってなら多様なものを十分自分からつくりだすという力が、それによってじつさい殺されてしまうのである。同様に、もしわれわれが子どもたちに、すでにあまりにも完成されすぎているものをあたえるならば、そのことによって同時に、一般的なもののなかに特殊なものを見えるという要求を子どもから奪い去ってしまった、またそれを発見する（たとえば、全く一般的な立方体的な形およびその集合のなかに、あるいは一個の家具ないし部屋の器具を見たり、あるいは一匹の動物その他を見たりする）手段を奪ってしまう（*荘司雅子*訳）。

（中略）たとえば、現在の遊びの現場をかんがみれば、テレビゲームやプラモデルはまさに積み木の ① にあるおもちゃと言えるかもしれない。すべてが製作者によってお膳立てされすぎていて、子どもの目の前に広がるイメージが完成されすぎている。そこに子どもの創造力が発展する余地は小さい。（中略）

一方で、積み木は、「自己完結的な、しかもたやすく分離され、そしてふたたびもとどおりにされ得る一個の立方体」にすぎない。だが、積み木は、創造と分解を繰り返す自然の摂理と同様に、分離と再生の繰り返しの中で、「全体と部分」を生きいきととらえることができるようになる。第三恩物のように、八分割された小さな立方体を、ふたたびある中心点にお互いの角をびたりとくっつけることで、元の大きな立方体の秩序を回復する。「生命の内面的な中心点・関係点および融合点、もしくはそれらの生命の調和と統一」を、積み木を通じて子どもは、神の創造した自然として観察し、体感しているのである。

そして、²その自然の摂理は建築の原理にも応用される。八つの直方体に分離される第四恩物の説明では、かまどのかた

ちに積み木を組み合わせる事例が出てくる。「スプーンの用意ができた。料理ができあがった。母と子はかまどを押す。かまどは崩れる。崩れてもとの建材、またはレンガになる。かまどは同じ大きさの建材からできているのである」。部分と全体の調和を、かまどという生命イ持^cの基礎的な道具の建設と分解を通じて知る。

第五恩物は三種類、二八のパーツに分けられ、かなり複雑な表現が可能になる。すると、積み木遊びは「都市の建設」へと向かう。

子どもたちの世界は、最初は家や部屋のなかで、テーブルや腰掛けの上で、また小さい寝台のなかで展開されるが、いまや記憶のなかにおいてもそれらの像や表象やそれにもとづく表現もまたそれと同じように拡がってゆくのである。家の階段や屋外階段・井戸・教会・市町村役場、主要な建物のある一つの村全体があらわれ、つぎにふたたび共同のパン焼きかまどだけがあらわれる。さらに市場があらわれ、そしてここでまた市庁舎あるいは守衛本部、市の門、そしてこの市の門を通って外に出たところにある橋などがあらわれる。これによってわれわれはふたたびつぎのようなことを知るのである。すなわち、これらの恩物は、子どもの内的ならびに外的な発達過程といかに密接に結びついているか、またその内的な発達過程をいかに促進し、明瞭にするか、また子どもはそれを手段にしていかに自己を強め、そしていわば自己自身でいかに成長するか、ということである。(荘司雅子訳)

後半はやや分かりにくいのが、要するに、フレーベルの積み木の思想のなかには、積み木を積み上げていき、建造空間を拡げ、都市を開発していくことと、子どもが自己を形成して知見を広めていくことが、ちょうどドイツ語の *binden* と英語の *bind* という動詞に「建物を建てる」という意味と「人格を形成する」という意味がともに含まれているように、表裏一体となっているのである。³ 積み木は、あたかも自分自身の成長・発展の鏡のような存在であると言っても良いだろう。

* * * (中略) * * *

フレーベルは『母の歌と愛撫の歌』(一八四四年)という本を刊行し、彼の書いた母と子の愛撫や手遊びの詩のほとんどにローベルト・コールが曲をつけている。歌にあふれた幼稚園生活のなかで積み木遊びに歌があることは、取り立てて

驚くべきことではないかもしれない。だが、フレーベルのもたらした革新性はまさにここにある。というのも、積み木を積みながら歌をうたうことは、②だからである。歌と労働はかつて不可分のものであった。田植唄、馬引き唄、粉ひき唄、木挽き唄などの労作歌は、もともと仕事の苦痛を軽減させること以外に、仕事にリズムをもたらす、あるいは、共同作業者との呼吸を合わせるといふ効果があった。積み木をはじめ、さまざまな遊びにメロディーがつけられるフレーベルの幼稚園は、まさに、リズムのなかで作業を活性化するという効果を園児にもたらす。

ただし、フレーベルの積み木の論考には、積み木を積み立てるときの歌があつても、積み木を崩すときの音に注意が払われていない。そもそも、崩すときの音に関する描写がない。それこそフレーベルが教育の現場にあつてはならないと考える「乱れ」であり「無秩序」だからかもしれない。(中略)フレーベルが積み木の性質として分解と統一に言及するとき、重きはつねに「統一」に置かれ、「分解」はあくまでその補助的役割を果たすにすぎなかった。積み木はつねに整理され、一定の遊具箱に入れられる。積み木を共同で使用することは大いに奨^d励されていたが、その場合は、かならず、自分のものと他人のものを認識して使用し、最後には自分の箱に片付けることが注意書きとして述べられていた。

けれども、積み木が崩れる音は転生の音でもある。それは、積み木の分解の副産物であり、発酵の音でもある。積み木⁵が地面にぶつかる音は反転の音でもある。積み木がまさに崩れようとするときの息を呑む空気の緊張は新しい世界の兆しであり、そのときの気配は何かが生まれることへの期待である。これは象徴的に述べているのではない。(中略)フレーベルほどの子どもの観察に卓^eエツした能力を持つ人間であれば、崩すという幼児たちの仕草と、崩す寸前に熱を帯びる幼児たちの赤らんだ顔と、幼児たちのまわりを包む張り詰めた空気のなかに新しい創造性がすでに含まれていることに、もつと目を向けてもよかつたはずである。さらに言えば、積み木というおもちゃは、生産も増殖も分解の一構成要素にすぎず、基本的には分解過程のなかの一瞬の輝きにすぎないことを伝えているようにさえ思える。

フレーベルが積み木遊びから「秩序」を生み出そうとしたことの意義は認めつつも、なおそのうえで、以下のようなことを想像せざるにはいられない。積み木を、何よりもまず「分解するおもちゃ」だと定義できれば――。かまど、家、城、都市空間、そういつた建造物を「作り上げるもの」である以前に「分解されるべきもの」ととらえれば――。その建造もまた分解に向かつてなされているのであり、分解されるべきものを建設することを建築と呼ぶのであれば――。幼児の教育は幼児を高みに連れていくのではなく、無秩序な深いところで磨かれることであるならば――。③――。この世界に増殖し続ける建造物・生産物がすべて分解しやすいものであつたならば――。

積み木は、そんなありえたかもしれない別のしなやかな「世界」を静かに示している。あるいは、幼稚園の園庭にあふれんばかりに育てられることが想定されていた植物も、ものが不変ではなく、枯れて土に還ることを園児たちに長い時間をかけて無言のまま教えてくれている。人間も土のように、ものを分解し、みずからも分解していく存在であると自己認識できるのであれば――。精神も「統一」から漏れ出るものがあり、それがまた人間の特徴となり、創造性の源になるとするならば――。人間総体をもっと異なったふうに、柔らかく、寛容に捉え直すことが幼稚園という環境のなかでこそできるのではないか。

（藤原辰史『分解の哲学 腐敗と発酵をめぐる思考』による。ただし一部変更した。）

問一 傍線 a ～ e のカタカナを漢字に直した場合と同一の漢字を用いるべき文はどれか。それぞれ一つ選びその符号を答えよ。

a シュウ学

- ア 彼の書いた卒業論文はシュウイツだった。
- イ あまり過去にシュウチャクすべきではない。
- ウ 外国人旅行客を案内するボランティアをボシュウする。
- エ スポーツ選手のキョシュウに注目が集まっている。

b 紙フク

- ア ワクチンのフクハンノウで発熱する。
- イ 物語にさまざまなフクセンを張る。
- ウ 友人にゼンフクの信頼を置く。
- エ 外国語の発音をハンフク練習する。

c イ持

- ア 人前に出ると緊張してイシユクしてしまう。
- イ 本社を首都圏から地方都市へとイテンする。
- ウ きのことには食物センイが豊富に含まれている。
- エ 中世ヨーロッパではペストがモウイをふるった。

d 奨_レイ

- ア 感染症予防のため、手洗いを_レイ_レコウする。
- イ 親しい仲であっても_レイ_レセツを保つべきだ。
- ウ 川の対岸にソウ_レイ_レな神殿が見えた。
- エ 労働環境を守るためにホウ_レイ_レを遵守する。

e 卓_レエツ

- ア 資料を_レエツ_レランするために図書館を訪れた。
- イ 二年ぶりに故郷に帰省して_レエツ_レネンした。
- ウ 全てが思い通りに進んで、彼は_レゴマン_レエツ_レだった。
- エ 天正遣欧使節はローマ教皇にハイ_レエツ_レした。

問二 傍線1「それには理由があった」とあるが、その説明として最も適切なものを次の中から一つ選び、符号で答えよ。

- ア 子どもが家具や動物といった特殊なものを知る前に、おもちゃによって立方体や直方体という一般的な形状を覚えるため。
- イ 立方体を切り分けた一般的な形のおもちゃであれば、家具と組み合わせたり、動物と一緒に遊んだりできるため。
- ウ あまりにも複雑な形のおもちゃでは、幼稚園に通う幼い子どもでは遊び方を理解して一人で遊ぶことができないため。
- エ 恩物は部分によって全体が構成されるので、完成度の高いおもちゃを求める子どもの要求を満たすことができるため。
- オ 単純な形状のおもちゃを具体的なものに見立てたり組み合わせることで、さまざまなものをつくりだす力を伸ばすため。

問三 空欄①に入る最も適切なものを次の中から一つ選び、符号で答えよ。

- ア 終極
- イ 対極
- ウ 極点
- エ 終点
- オ 原点

問四

傍線2「その自然の摂理は建築の原理にも応用される」とあるが、その説明として最も適切なものを次の中から一つ選び、符号で答えよ。

ア 恩物を小さな部品に分解したり元の立方体に戻したりすることを通じて、自然のなかでは部分が秩序をもって全体を構成していることを知った上で、同様に部分と全体が調和した人工物を恩物で作ったり、崩して部品に分解したりすること。

イ たやすく分離され、そしてふたたび元どおりになる積み木で遊ぶことを通じて、神の創造した自然のなかに働く摂理を観察し、体感することで、基礎的な道具を上手に建設するためにも、神の導きが必要であることを信じるようになるということ。

ウ 第三恩物の八分割された小さな立方体をふたたびくつつけて元の大きな立方体を作ることができるようになるように、自然は立方体を基本に作られているという秩序があることを知り、かまどなどを建築する際にも立方体を基本的な形状とすることを信じるようになること。

エ 創造と分解を繰り返す自然の摂理を、元の大きな立方体からの分離と再生を繰り返す積み木を通してとらえることを元に、同じ大きさの建材からできている建築物もまた、いつかは必ず崩れて分解する無秩序な存在であることを知るとのこと。

オ 第三恩物の八つの部品を元の立方体の中心点でびたりとくつつけると秩序が回復するように、自然には内面的な中心点があるという秩序が分かると、かまどのような中心部が空洞になっている建築は少し押すだけで崩れてしまうことが理解できるとのこと。

問五

傍線3「積み木は、あたかも自分自身の成長・発展の鏡のような存在であると言っても良い」とあるが、そのように言える理由として最も適切なものを次の中から一つ選び、符号で答えよ。

ア 子どもが積み木でどのような都市を建設するかが、その子どもが成長した後には収めることになる社会的成功に対応しているから。

イ 子どもが肉体的・体力的に成長していくことが、積み木でより大きな作品を作り上げることができていることに対応しているから。

ウ 子どもが成長して自己が確立されることが、他の子どもとの共同作業により積み木で都市を建造できることに対応しているから。

エ 子どもの精神が発達し世界認識が拡大することが、積み木で作るものが家の一部から都市全体へと拡大することに対応しているから。

オ 子どもの人格が形成されることが、ドイツ語や英語では「建物を建てる」という意味を持つ動詞で表現されることに対応しているから。

問六

空欄②に入る最も適切なものを次の中から一つ選び、符号で答えよ。

ア 歌の本来の姿からかけ離れたもの

イ 歌の原初的形態と呼ぶべきもの

ウ 歌の危険性を暴露するもの

エ 歌の新たな可能性を照らし出すもの

オ 歌の悲しき出自を伝えるもの

問七 傍線4「フレーベルの積み木の論考には、積み木を積み立てるときの歌があつても、積み木を崩すときの音に注意が払われていない」とあるが、

著者はそれがなぜだと考えているか。その説明として最も適切なものを次の中から一つ選び、符号で答えよ。

- ア 教育において秩序を重視したフレーベルは、積み木が崩れて秩序が失われることに積極的な意義を見出さなかったから。
- イ メロディーとリズムの役割を見抜いていたフレーベルは、積み木の崩れる音にも秩序を見出したから。
- ウ 幼児の教育のために積み木遊びを推奨するフレーベルは、積み木を崩すことには言及しなかったから。
- エ 積み木に分解と統一の性質を認めていたフレーベルは、ものが不変ではなく分解していくことを当然だと考えたから。
- オ 教育の現場に無秩序があつてはならないと考えるフレーベルは、子どもが積み木を崩すことを禁じていたから。

問八 傍線5「積み木が地面にぶつかる音は反転の音でもある」とあるが、その説明として最も適切なものを次の中から一つ選び、符号で答えよ。

- ア 崩れ落ちて下へと向かつていた積み木が地面に跳ね返ることによって、運動の方向が上へと方向転換すること。
- イ 統一を失った積み木が地面にぶつかる音が、遊びの時間が終わったことを子どもたちに告げ知らせること。
- ウ ある形に積み上げられていた積み木が崩れ落ちて地面に散らばること、新たな形に積み上げられる可能性が生まれること。
- エ 積み木を崩す子どもたちの熱を帯びた雰囲気、新しいものを生み出す創造性が含まれているとフレーベルが気づいたこと。
- オ 積み上げ終わった積み木に関心を失っていた子どもたちが、積み木が地面にぶつかる音を聞いて振り返ること。

問九 空欄③に入る最も適切なものを次の中から一つ選び、符号で答えよ。

- ア 他人と混じり合うことなく、確固たる自己を確立することが教育の目標であるならば
- イ 幼児の生活に乱れがなく、誰もが同じように秩序正しく生育していくのならば
- ウ ものを分解することではなく、作り上げることが人間の特徴であるならば
- エ 子どもに秩序を求めることなく、幼稚園が無用のものになるならば
- オ 人間の成長は統一ではなく、人間を柔らかくほぐしていくことだとするならば



問十 次の文のうち、本文の内容と合致するものを三つ選び、符号（ア～カの順）で答えよ。

- ア フレーベルは、全体が秩序をもった部分から構成されるという考え方にしたがって第三恩物から第六恩物を考案した。
- イ 建築物が同じ大きさの建材からできていることを学ぶために、第五恩物はすべて同じ大きさのパーツに分解される。
- ウ フレーベルの設立した幼稚園でメロディーがつけられていた遊びは、積み木遊びだけではなかった。
- エ フレーベルの設立した幼稚園では、積み木は園児みんなで共有され、一つの遊具箱にまとめて片付けられる。
- オ 著者は、積み木というおもちゃは基本的に秩序ある全体を構成しており、分解されるのは一時的なことであると考えている。
- カ 著者は、幼稚園を、人間が外面も内面も分解されうる可変的な存在であることを認識するのにふさわしい場であると考えている。

(このページは白紙です)

《注 意》

採点・集計などのさいに受験番号の読み間違いが生じないように、受験番号はつぎの点に注意して記入すること。

1. 受験番号は2箇所記入する。
2. HBの鉛筆・シャープペンシルを使って、1マス1字ずつはっきり書く。
3. ほかの数字とまぎらわしくないように書く。

良い例	1	3	4	5	6	7
悪い例	1(7)	3(8)	4(6) 4(9)	5(6)	6(4)	7(1) 7(9)

それぞれ（ ）内の数字と誤解されやすい。